

刑事は、僧侶になるために
必要な「修行」だった

大島龍穂氏

僧侶



RYUON
OHSHIMA

1946年東京生まれ。水産高校を経て、65年、神奈川県警察の警察官となり、県警本部機動捜査隊、捜査一課などで活躍。2000年横須賀警察署刑事一課強行犯係係長のとき退職。翌日より日蓮宗の上人に師事して修行を始め、03年、身延山久遠寺にて信行道場を修了して僧侶となる。現在、神奈川県横須賀市の自宅を拠点に僧侶としての活動を行う。

CAREER CRUISING

キャリア・クルージング

Interview = 大久保幸夫、入倉由理子
Text = 入倉由理子 (54~56P)
大久保幸夫 (57P)
Photo = 那須野公紀

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探すため、各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。

現役の刑事が出家して僧侶に。現在、自宅を拠点に僧侶として活動する大島龍穂氏は、2000年3月、思いきった転身をした。当時53歳。定年まで7年を残す決断は、周囲を驚かせ、また「経済的に考えれば定年まで待つべき」という声も多かった。しかし、大島氏は「7年も待てなかった」と当時を振り返る。その真意を伺った。

父の影響で「人の役に立ちたい」という 思いを常に持ち、警察官の道へ

父が病弱だったせいで、父が入院すると母が付き添い、大島氏は幼少時、祖母と過ごす時間が長かった。厳しい祖母ではあったが、とても信心深い人で「中学時代に一度、僧侶を夢見たことがありました。祖母の影響が強かったかもしれませんね」と大島氏はいう。

大島氏が小学校に入学するころには父も元気になり、父母のもとで一緒に暮らすことができるようになった。「父は体こそ強くなかったけれど、親戚や近隣の人から、何か問題が起こったときなど頼りにされる人でした。労をいわず人の気持ちを慮り、面倒をみる父を見て育った影響か、私自身もとても正義感が強かったし、また、常に『人の役に立ちたい』という気持ちがありました」

船乗りになりたいという希望を持って水産高校に入学し、入部した柔道部で尊敬できる先輩との出会いがあった。結局船乗りにはならず、先に警視庁に入ったその先輩に導かれるように、神奈川県警察に入った。「人の役に立ちたい」という大島氏の志向に合致したのである。



警察官採用試験を受けるとき、父から「実の子ではない」だと告げられた。まさに青天の霹靂である。

「戦後の混乱期、父母が行方知れずになった私を、両親がもらい受けてくれたそうです。『感謝』ということが、より深く心の中に刻まれたのは、このときでしょう」

県警に入った後、最初の1年間は警察学校で学び、その後、正式配属で山手署へ配属された。大島氏の希望は少年係だった。予防、防犯のためには、少年のうちから犯罪の芽を摘み取ることが重要と考えていたからだ。しかし、それは叶うことなく、派出所勤務などを経て、県警本部機動捜査隊に配属となった。この部署では基本的に、犯罪の初動捜査を行う。ここで大島氏はさまざまな凶悪犯罪や人の生死と毎日、向き合うことになった。

「『鬼刑事』なんて異名をとったのは、このころですね

大島龍穂氏 キャリアヒストリー

1946年	0歳	東京・駿河台に生まれる
1959年	13歳	中学1、2年のころの夢の1つは僧侶だった
1962年	15歳	神奈川県立三崎水産高校無線通信科に入学。船乗りを志していたが、途中で諦める。高校時代は柔道に熱中
1965年	18歳	神奈川県警察に入り、警察官となる。警察学校で学んだ後、希望は少年係だったが、派出所勤務を経て押送係を担当
1971年	24歳	県警本部の機動捜査隊に配属。さまざまな凶悪犯罪と向き合い、「鬼刑事」の異名をとるようになる
1982年	36歳	警部試験に不合格に。ノンキャリアの場合、警部試験に受からなければその先の警視、警視正といったキャリアの道は開けないが、不合格となり、「万年警部補」でその後を過ごす
1994年	47歳	父が亡くなる
1996年	50歳	定年後のライフプラン研修に参加。「第二の人生は僧侶」と考え始め、大明寺・久保日維上人に弟子入りを申し出る
		 <p>警察官の制服を着用するのは稀。普段は「私服刑事」だった</p>
1998年	52歳	母が亡くなる。この後、弟子入りを許される
2000年	53歳	神奈川県警察を退職、本格的に僧侶の道へ
		 <p>厳しい修行前なので、現在よりもずっとふくよかだ</p>
2001年	54歳	大明寺・久保日維上人が他界。福井県・妙龍山本楽寺の梶川龍良上人の徒弟に
2003年	56歳	身延山久遠寺で行われる「信行道場」を修了。僧侶の資格を得る



(笑)。犯罪の被害者たちのご家族と日々、接することで『犯罪者の逮捕を第一』と考えるようになりました。ホシを挙げるためなら、上司に逆らうことだってありましたよ」

銀行の立てこもり事件の最中、死を覚悟したこともあった。自分の死とも常に向き合う生活だったのだ。

「ライフプラン研修」の参加をきっかけに 第二の人生を「僧侶」と意識

大鳥氏が「第二の人生」を意識したのは、50歳のときだった。神奈川県警察が50歳前後の職員に向けて開催する、定年後のライフプラン研修への参加がそのきっかけだった。「定年後のライフプランを書けと言われて、書けない自分に驚いた。自分から刑事の仕事を取ると何も残らないことに気づいた」という。

「刑事の経験を生かした再就職も難しいし、経済的にも働かざるを得ない。いろいろ思いを巡らす中、『第二の人生は僧侶』という選択肢が浮かび上がってきました」

その2年前に父を亡くしたときから、大鳥家の菩提寺であり、警察の仕事でもつながりがあった大明寺の久保日維上人と親しくしていた。時折、大明寺を訪れ、墓の前で真剣に手を合わせる人々の姿を見て、仏の道に入り、残りの人生を人に役立つことをして過ごしたいと、あらためて思うようになったという。

「師を決めて弟子になれば、僧侶になれると知人から聞きました。そこで久保上人に弟子入りをお願いしたのですが、今思えば、『鬼刑事』といわれた私が仏門に入りたいといっても、本気とは思えなかったのでしょうか。御上人が首を縦に振ってくださったのは、私が初めてお願いしてから2年経った、1998年のこと。母が亡くなったときでした」

そして、定年まで7年を残し、2000年、神奈川県警を退職した。一人前の僧侶となり、多くの人の役に立とうとするならば、「60歳からのスタートではあまりに時間がない」と感じたこと、そして僧侶になるための厳しい修行に耐えるには、少しでも若いうちがいいと思ったことがその理由である。そして刑事の職を「やりきった」という自信もあった。犯罪者検挙に精一杯の手を尽くし、手を抜いたことなど終ぞなかった。ひと粒の後悔もなく、次のステップに進むつもりで、神奈川県警をあとにした。

僧侶はすべての人の役に立てる仕事 できるだけ多くの不幸せな人を救いたい

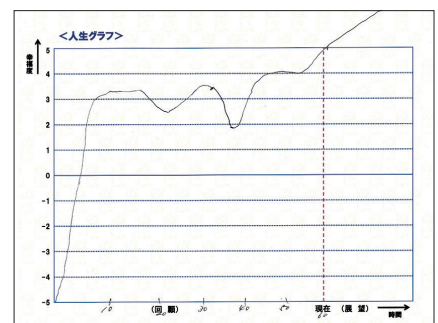
その後、外界との接触を一切禁じられ、厳格な規則のもとで修行に専念する「信行道場」を経て、大鳥氏は正式な僧侶となった。寺を持たない僧侶として、法事の手伝いや講演、執筆などによって仏教の教えを説きながら、少年院の篤志面接委員の活動や、数々のボランティアをこなす毎日だ。そんな中、大鳥氏の心に去来するのは、「大きなものに動かされている」という感慨である。

「さまざまな方がご相談にいらしたとき、刑事時代、普通だったら見なくてもいいドロドロとした世界を、いやというほど見てきたことで、私にしかできないお話をさせていただける。30代半ばで警部試験に不合格になったことすら、今では仏様の御心だと思えます。もし合格していたら、その後20数年間、現場で犯罪者と対峙し、生と死について考え続けることはなかったでしょうから。私にとって、刑事時代はまさに修行だったのです」

刑事は人の役に立つ仕事には違いない。しかし、刑事がかかわれるのは犯罪者やその被害者に限定される。

「僧侶はすべての人の役に立てます。とにかく、できるだけ多くの不幸せな人を救いたい。それが、私が仏からいただいた役割だと思うのです」

曲線の「谷」は、1つは「人の役に立つ実感が得られなかった時期」と、もう1つは「両親の死」の時期に当たるといふ。



■ 大島龍穂氏のキャリアをこう見る

刑事から僧侶へ

360度の転進を支えた4つのS

大久保幸夫

ワークス研究所 所長

大島氏宅を訪問したとき、彼は少々遅刻した私たちを通りの角まで出て待っていてくれた。作務衣を着た彼の表情には、「鬼刑事」と異名をとった刑事時代の面影はまったくない。柔和な表情は、若いころからずっと仏の道にあったかのごとくである。

「刑事から僧侶とは180度違う転進ですね」と問うと、彼は「それが自分の中では全然反対の職業という思いはなくて、むしろとても近い職業というか、360度の転進とでもいう感じなんです」と笑う。

世のため人のため、何か貢献したいという気持ちや、正義感に基づくところは、どちらも共通。また死というものの近さも同じ。そしてなにより刑事での経験がいま生きているという。「たとえば、犯罪をしてしまった子どもを持つ親が死にたいほど悩んでいるときに、少年犯罪の現実を見てきたからこそ話してあげられることがある」というのである。

大島氏の転機は47歳のときの父の死、そして52歳のときの母の死が密接にかかわっていると感じる。転機にはきっかけとなる出来事(イベント)があり、時間をかけてその転機を乗り越えてゆくものである。キャリアカウンセリングの専門家として知られるナンシー・K・シュロスバーグ氏は転機を乗り越えるにはリソースの点検が重要で、特に4つのS—Situation(状況)、Self(自分自身)、Support(支え)、Strategies(戦略)を見極めることだとしている。

大島氏の場合も、刑事としてのこの後の可能性や定年後の生活という状況、自分の価値観や刑事の仕事をやりきったと思う自分自身のこと、妻の理解や教えを乞える久保上人という支え、体力があるうちに修行をしたほうがいいという戦略が揃って、新しい道へと収束していったのではないだろうか。

そして転進は見事に成功した。

「もともと53歳で僧侶になるということが、決まっていたのではないか。それが運命だったのではないかと思うんです」と大島氏は語る。転機をうまく乗り越えたとき、人はそれを「あらかじめ決まっていた」ことのように感じるのである。大島氏のケースも、まさにそれに該当するといえるだろう。

大島氏の場合の変化を克服するステップ

